

[研究報告]

「ドキュメンテーション型実習日誌」の試みと課題¹⁾

岩田恵子・大豆生田啓友・鈴木美枝子・田澤里喜・田甫綾野

要 約

保育におけるドキュメンテーションの研究の一環として、学生の保育の場における実習日誌にドキュメンテーションが導入された際の意義と課題について検討を行った。研究1としては、ドキュメンテーション型実習日誌を用いた際の実習生と園の保育者の声を事例として分析し、研究2としては、実習日誌の記述内容が従来型の時系列とエピソード形式であるときとドキュメンテーション型であるときとでどのような特徴があるかを分析した。その結果、ドキュメンテーション型実習日誌によって、子どもの遊びの楽しさやおもしろさに気づきやすくなること、保育者が実習生から学びやすくなること、保育のプロセスを語り合い、共有しやすくなることが見出された。さらに、従来の形式の実習日誌と比べて、保育者と実習生との関係が、「教える－教えられる」という関係から、保育や子どもについて「共に考えていく」関係になりやすいことが見出された。今後、より具体的にドキュメンテーション型実習日誌によって、どのように保育に関する学びが深められていくかと、それに関する有効な支援のあり方を検討する必要がある。

キーワード：ドキュメンテーション、保育者養成、実習日誌

問題

保育の質の確保と向上が、わが国の大きな課題となっており、厚生労働省による「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会」においては、「中間的な論点の整理」が示された。ここでの保育の質の確保・向上を検討する方向性のひとつとして、「職員間での対話を通じた園全体での保育の理念・情報の共有」があり、その具体的な検討事項として、「子どもの育ちや遊びに関する記録（写真、動画等を含む）の活用」があげられている²⁾。

写真を活用した保育記録に関しては、ポートフォリオ、ラーニングストーリー、ドキュメンテーションなど様々なものがあるが、それぞれその国や文化の歴史的・文化的背景のもと発展してきたものである。わが国においては、それらのよさをわが国の保育の実態や文脈の中で取り込むことで発展してきている。ここでは、保育の写真記録をドキュメンテーションと呼ぶこととする

が、それは、レッジョ・エミリア等のドキュメンテーションを参考にしながら、日本の保育の中で試行錯誤してきたものである。そうした日本でのドキュメンテーション研究はまだ端緒にたったばかりである³⁾。

また一方、保育者養成においても実習日誌にドキュメンテーションの活用がなされ始めている。保育の実習日誌に関しては様々な研究があるが、陸路ら（2019）は学生の実習日誌を分類する中で、「従来の時系列に沿った記録」のほか、「空間的な記録」、「エピソード記録」等の記録を紹介し、その中で写真を活用した記録も掲載している⁴⁾。また、亀山ら（2019）では、質問紙調査により実習における写真記録が「振り返りやすさ、保育環境の意味とそこに関わる子どもや保育者の関わりを多様に捉える」ことを明らかにしている⁵⁾。しかし、陸路ら（2019）で紹介されている写真を活用した記録は、1日の記録の中で写真を1枚用いているものであり、亀山ら（2019）の研究は、教育・保育実習においての子どもとかかわる時間を終えた後、保育環境を撮影し日誌に用いるものである。つまり、日常の保育と同じように活動の中で撮影された複数の写真を、自由なレイアウトで用いた記録ではない。すなわち、日常の保育におけるドキュメンテーションと似たような形で実習日誌に用いた研究、さらには、そのような実習日誌の意義について、質的に探っている研究はない。

そこで本研究では、端緒にたったばかりの日本版ドキュメンテーションの研究の一環として、学生の実習におけるドキュメンテーション、具体的には教育実習（幼稚園）および保育実習（保育所）における学生が日々の記録、学びのふりかえりとして書く日誌にドキュメンテーションが導入された際の意義と課題について検討することとしたい。

方法

本学部における教育実習（幼稚園）では2017年秋から、保育実習（保育所）では2018年夏から、実習日誌に写真を組み込んだドキュメンテーション型実習日誌の形式を用い始めている。全ての実習協力園でドキュメンテーション型実習日誌を一律に用いているわけではなく、日誌のために、学生が実習中園内で写真撮影をさせていただき、それを日誌に用いることに協力いただける園を実習以前に確認後、実習協力園の状況にお任せして実施している。

2019年夏の保育実習（保育所）で、ドキュメンテーション型実習日誌をなんらかの形で経験した学生は全体の約50%となった。この中には、実習期間中1日だけドキュメンテーション型実習日誌を用いたものから、実習全日をドキュメンテーション型実習日誌のみで行ったものまで多岐にわたっている。

なお、個人情報漏えい防止策として、写真を撮る際に使用する機材は個人のスマートフォンの使用は禁じ、デジタルカメラもしくは大学から貸与の iPod touch に制限し、実習期間中、その使用機材を園で保管していただく形で行っている。また、実習日誌に貼付する写真の印刷は園内のプリンターのみとし、基本的に、サイズを縮小した写真を9枚前後A4版用紙1枚に印刷

させていただいている。さらに、プリントアウトしたものの取り扱いに十分注意すること、デジタルカメラ等にあるデータは実習終了後、園内にて全て消去すること、などの対応をとっている。また、園児の個人名などの取扱いは、ドキュメンテーション型ではない従来の実習日誌と同様、園での指示に従う形である。

学生には、保育におけるドキュメンテーションについて、実習の事前指導で簡単な紹介を行い、ビデオで見た場面をドキュメンテーション型で記録してみる機会を作っているが、ドキュメンテーションはこう作らなければならないという形の指導は行っていない。また、写真の撮り方については、子どもとかかわることが実習の第一義であり、無理に全てを写真で残そうと思わないこと、遊んだ後のモノ、環境などを撮ることで、その写真をもとに書くこともできること、ドキュメンテーション型実習日誌だからといって必ず写真が必要なわけではなく、写真がなくともエピソードで書くことがあっても良いことなどを伝えている。

今回はこのドキュメンテーション型実習日誌の試みがもたらしつつあることを概観し、意義を探るため、研究1として、4園の事例について実習訪問担当者から見た実習受け入れの園側、学生の側双方によってインフォーマルに語られたことを記述し、園、学生それぞれが感じている手応えと課題について分析した。また、研究2としては、ドキュメンテーション型実習日誌を導入した際の学年で、3年次秋に行う実習前半2週間は、時系列とエピソードの形式で、4年次春に行う実習後半2週間は、ドキュメンテーション型で行った、ある幼稚園における事例を対象とした。実習日誌の内容、特に学生によって「子どもの遊び」がどのように記述され、そのことに対する指導担当の保育者のコメントがどのようなものであるかについて、実習日誌の記述をもとに分析を行った。

なお、今回の研究に際しては、園、個人の情報がわからない形で実習日誌の内容を分析することについての使用許可を得ている。

結果

研究1

研究1においては、ドキュメンテーション型実習日誌を実施している4園の事例分析を行う。対象の4園は、実施園の中から、園自体がドキュメンテーションを始めたばかりの幼稚園1園、保育所1園、園でのドキュメンテーションがかなり保育に根付いてきている保育所2園を対象としている。

事例1：A幼稚園（ドキュメンテーションに園も取り組もうとしているところ）

数年前に園長が替わり、子どもたちの意欲をさらに大切に、遊びを充実させた保育へと変えていく過程の中で、ドキュメンテーション型実習日誌を知り、2018年度の実習よりドキュメ

ンテーション型実習日誌を取り入れている。2週間の実習期間の中、1週間ごとにクラス、学年を変えて実習をするようにし、変更初日は、時系列型の日誌で1日のクラスの流れなどを理解した上で、翌日よりドキュメンテーション型実習日誌に実習生が取り組むように計画されている。

【園側の声】

ドキュメンテーション型実習日誌にしたことによる効果、手応えを園としてかなり感じてくださっていた。例えば、実習生がどこに着目をして子どもの姿や遊びを見ていたかがよりわかるようになった。また、ドキュメンテーション型実習日誌に取り組むことで、実習生が子どもの心の動きに着目する機会が得られ、それが、子どもに寄り添う、共感すると言ったことができる保育者の基礎を養成していると感じる、といったことが語られた。「明日はどうなるだろうね」といったわくわく感^①を担当教諭と実習生が共有しているような場面が見られるようになり、担当教諭と実習生の距離感が縮まった^②ように感じられていた。

さらに、時系列での日誌は形式的になりやすいが、ドキュメンテーション型実習日誌はいろいろな視点から書くことができること、教員が見えてなかった部分が可視化されている^②ので、より子どもたちの様子を知ることができるようになったことも語られた。園でドキュメンテーションを通して保護者に発信をすることを検討していた中であったので、日誌をドキュメンテーション型にしたことで、良いタイミングで学び実践していくことができたと評価していた。

【学生の声】

この園でドキュメンテーション型実習日誌に取り組んだ実習生は、自身の学びを次のように述べた。ドキュメンテーション型実習日誌を書いたことによって、子どもの遊びがどのように変化するか、子どもの遊びからどういう学びにつながっているかという視点で見ることができた。後で見返して、そのときの状況や子どもの姿などがすごくわかりやすい。子どもの遊びのプロセスが写真でわかるので書いていて楽しい^①。写真を見ながら担当教諭とふりかえりをするので、自分の考えを伝えやすく、先生の視点の話が理解しやすい。

【この園での取り組みから見えること】

情報量の多い写真を使用するからこそ、実習生も担当教諭も子どものことをより深く理解しようとしている。さらに、ドキュメンテーション型実習日誌に使用する写真を担当教諭との反省会にも活用するなど、共に子どもについて語り合うプロセス^③があった。おそらく、日誌の形式がドキュメンテーション型に変わっただけでなく、このように語ることが、園と実習生と双方が手応えを感じていることにもつながっていると捉えられる。また、子どもの姿を予想する「わくわく感」や対話の創出が、実習生だけでなく、保育者の質の向上にも寄与している可能性がある。

事例2：B保育所（ドキュメンテーションに園も取り組み始めたところ）

10年ほど前から「子どもの主体性」をもっと大事にする保育を、と取り組み始めたが、園の体制から、なかなか難しいことも多かった。それでも数年前くらいから、行事の見直しやドキュメンテーションなど少しずつ、仕事が大変になるという感覚ではなく、保育者も楽しみながら取り組むことを始めている。ドキュメンテーション型実習日誌は、園のデジタルカメラを貸与していただく形で行った。また、実習生は、実習1週目の平日は、0歳児クラスから4歳児クラスまで1日ずつ入らせていただき、実習2週目の平日は2歳児クラスに入らせていただいた。また、土曜日保育、休日保育では幼児の異年齢クラスでの実習であった。

【園側の声】

ドキュメンテーション型実習日誌については、園長先生が以下のことを語ってくださった。

学生の見方がシンプルに見えることをまず評価してくださった。ドキュメンテーション型実習日誌では、文章だけではわかりにくいこと、ベテランの保育者には難しい、子どもが楽しんでいることを発見した①ことが伝わりやすい。実際、実習生の入ったクラスの保育者が、「園長先生、見てください」と日誌を持ってきて、自分の見方との違いを話すことから、保育者自身の感じ方を見直し、クラスのふりかえりがあった②ことも語ってくださった。さらに、園の中で、そのような対話が生じることを評価してくださった。

また、園でも日常のドキュメンテーションを試行錯誤して作成していらっしゃることと比較しても語ってくださった。保育者はどうしても全体を紹介しようとしてその日の保育で行ったことのみを取り上げて作成する傾向があるのに比し、実習生は、ある子どもの視点を丁寧に見ていることをあげ、このような見方も必要であることを感じていることもお話しくださった。子どもの興味を共有し、喜び、おもしろさを発見するようなドキュメンテーションを考え、保育者それぞれの見方、多様性をも大切にしたい機会になるとも評価してくださった。

【学生の声】

初めての実習であった3年生は、園の先生から「園でもドキュメンテーションを始めたばかりなので学ばせて」と言われて緊張した。しかし、写真を撮ること、その写真に吹き出しをつけながら書いていくことが好きでもあり、実習日誌自体が、子ども自身が楽しんでいる姿①を中心にしていることもあって、楽しんで取り組むことができた①とのこと。

最初の日には2時間から3時間かかってしまったように記憶していたが、数日経つと、1時間半から2時間くらいで書いていた。午前中の遊びの中で、こんな感じで遊んでいるという印象深いところを写真におさめた。1日30枚くらい撮り、パソコンでA4版に9枚おさまる形で2枚ほど印刷させていただくものを選んで、そこから、3つくらいのエピソードとして日誌にまとめていった。保育者から、「こういう姿が見えていいよ」と言われてほっとすることと、「これなんで選んだの?」と言われて、答えることが難しかったことも語ってくれた。

【この園での取り組みから見えること】

実習協力園でも、ドキュメンテーションに取り組み始めたところであり、学生の書く日誌を

見る視点が、これまでの指導を行うものとしての記録というよりも、どんな子どもの姿が捉えられているかに視点が移動しているように捉えられる。また、ドキュメンテーション、特に写真は、学生にとっても、また、保育者にとっても、子どもたちが楽しんでいる姿を見出す助けとなっていることがうかがえた。さらに、それは、先生同士の対話のきっかけ^③ともなっていた。

事例3：C保育所（ドキュメンテーションにすでに園では取り組んでいる）

C保育所では、園内ですでにドキュメンテーションを進めている。実習生がドキュメンテーション型実習日誌に取り組んだことで、どのような変化があったかについて以下に記述する。

【園側の声】

日ごろからドキュメンテーションを取り入れているが、自分たちも試行錯誤を繰り返していて、何が正解なのかはわからない。そのような中で、実習生が、自分たちとは違う視点でドキュメンテーション型実習日誌を書いているのを読むと、自分たちもハッとさせられることがある^②。自分たちでは見切れていない子どもの微妙な気づきや遊びの展開に、実習生が良く気づいてくれるので、保育者の方も勉強になった。写真があることで、それを見ながら、子どもについて語り合うことができ、子どもを見る視点なども伝えやすい^③ように思う。最後の反省会のときも、ドキュメンテーション型実習日誌を見ながら進めることで、取り上げたい場面を共有しやすく、保育者側からも伝えたいことが伝えやすかったように思う。

【学生からの声】

時系列やエピソード記録だけでは伝えづらい子どもの遊びの変化などを、写真を使用することで伝えやすかった。特に、ひとつの遊びがどのように変化していくかを捉えるのに、写真があるとその変化が表現できるので、書きやすかった。また、ひとつの遊びでも、子どもによってこだわる場所が違うことなどについて、それぞれの子どもが集中している場面^①を写すことで、子ども一人ひとりの思いやこだわりを日誌に書き記すことができたと思う。写真を使うことで、現場の先生との会話が aumentata。自分（実習生）が撮った写真を見ながら、「これはどういう写真？」と聞いてきてくれるので、子どもの様子について語り合う機会を多く持つことができた^②。写真を使うことで、子どもの表情も伝わりやすくなると思う。エピソード記録だけで詳細を記述することは大変だけれども、写真が加わることで、見てすぐわかるという良さがあると思った。写真を使いながら日誌を書くことによって、どこに注目しているかが伝わりやすく、担当保育者から「良い視点で見ているね。」などと声をかけられることがうれしかった。また、良い視点で捉えられている部分に赤線を引いてくださって、翌日には直接コメントをしながら返していただけることが、とてもありがたかった。日誌を後から見直しても、そのときの子どもの姿をすぐに思い浮かべることができる。

【この園での取り組みから見えること】

ドキュメンテーション型実習日誌を取り入れることで、保育者にとっても、実習生にとって

も、子どもの姿を共有しやすくなり、一緒に語り合うことで、お互いの子ども理解が深まる^③様子がうかがえる。

事例4：D保育所（ドキュメンテーションにすでに園では取り組んでいる）

D保育所では、日常的に保育者がドキュメンテーションを作成している。書き方については担当の保育者に委ねられており、共通の書式などはない。写真を数枚配置し、その場面や遊びについての保育者の読み取りが記されている。文章はそれほど多くなく、園長先生によると「30分くらいで書き上げている」とのことである。以前は「手書きにこだわっている」というようなお話もあったが、今年うかがったときにはPCで作成されているものも見られ、作成する保育者のやりやすい方法で作られているように思われる。

毎年3年生、4年生とも、それぞれ1～2名の学生を受け入れていただいているが、園長先生をはじめとする園の先生方が実習生に対して受容的であり、学生の良さを認めた上での指導をしてくださっている。保育も遊び中心の異年齢保育であり、子どもたちが好きな場所で好きなだけ遊ぶことができるため、学生自身も好きなところで遊ぶことができ、楽しく実習を送っている^①学生ばかりである。

日誌については実習生も数年前からドキュメンテーション型の日誌を取り入れてくださっている。学生は自分の興味関心や、子どもの遊びのおもしろさ^①に共感し、それをドキュメンテーションにしている。日々おもしろい子どもの姿^①が見られるので、実習生も日誌を書くことが困るという話はなく、日誌を書くのが楽しい^①と話す学生が多い。

【学生からの声】

今年実習をした一人の学生（4年生）は、訪問指導の際に、「どうしても書きたいことがたくさんあり、ドキュメンテーションなのに、文章の量が多くなってしまう」との課題を語った。

【園側の声】

園長先生とお話では、実習生の「ドキュメンテーションなのに文章の量が多くなってしまう」という悩みを把握してくださっていたが、「実習日誌は文章が多くて良いと思う」とおっしゃった。その理由としては、実習日誌は自分の実習をふりかえるものであり、保育者が保護者に伝えるためのドキュメンテーションとは違うということをあげられた。実習生は子どもの姿を読み取りそれを他者に伝えるだけではなく、自分がそこで何を感じ、どう理解し、どうかかわったのか、そしてそれをどうふりかえるのかということが大切^③である、ドキュメンテーションにすることによってそこが抜けてしまう学生^③がいるが、もったいないとお話くださった。そして、園の先生方の作成するドキュメンテーションを日々目にするのが、簡潔に書かなければという意識を学生に与えてしまっているのではないかとのお話があった。

【この園での取り組みから見えること】

遊びの読み取りは大切であるが、そこで自分がどうかかわり、それをどう省察するのが、実習日誌としては重要な視点であると考えられた。ドキュメンテーションの課題としては、写

真を実習生自身が撮ることによって、自分が写真には入らない。さらに、写真の解説という視点で記すと自分の存在が消えてしまいがちであるところだと思っていたので、園長先生のお話を共感的に受け止めることができた。D保育所での学生の日誌を見ると、遊びを客観的に記述するだけではなく、自分の姿も交えてドキュメンテーションを書き、また「考察」という項目もあえて作られているため、そのエピソードの読み取りを意識して書くような日誌になっていた。

4園の事例から見えること

①保育の営みの中にある「楽しさ」と「おもしろさ」に気づくこと

4園の事例に共通してみられることとして、実習の中にある「楽しさ」、さらには「おもしろさ」があげられる。この「楽しさ」「おもしろさ」は実習、さらには保育の魅力が高まる大きなきっかけと思われる。さらに、この「楽しさ」「おもしろさ」には大きく分けて2種類あることにも気づく。ひとつめは、子どもの遊びの展開に対するものである。「子どもが楽しんでいることを発見した^①」(事例2)、「子ども自身が楽しんでいる姿^①」(事例2)、「日々おもしろい子どもの姿^①」(事例4)といったように、まずは保育の中にある子どもの遊びの魅力が伝わってくる。さらにその「おもしろさ」は、「子どもによってこだわる場所が違うことなどについて、それぞれの子どもが集中している場面^①」(事例3)というように、よりこまやかに子どもの興味関心を探求する方向にも向かっている。さらには、「『明日はようになるだろうね』といったわくわく感^①」(事例1)といったように遊びの次への展開へ向かう姿勢も見られる。このような子どもの遊びの「おもしろさ」に気づくプロセスは、実習生だけではなく、保育者にも見られるものであった。

ふたつめには、このような遊びの「楽しさ」「おもしろさ」について、「書いていて楽しい^①」(事例1)「楽しんで取り組むことができた^①」(事例2)、「日誌を書くのが楽しい^①」(事例4)といった様子が見られる。実習生が楽しんで記録を書いている様子が見られることは、非常に大きな特徴である。

②実習生のドキュメンテーションから、保育者にも学びがあること

今回の事例から見られるふたつめの特徴として、実習生のドキュメンテーションをきっかけに、保育者と実習生の関係性の変化があり、保育者にとっても学びの機会が増えることがあげられる。例えば、「担当教諭と実習生の距離感が縮まった^②」(事例1)、「子どもの様子について語り合う機会を多く持つことができた^②」(事例3)とあるように、保育者と実習生が、今までとは異なる形、具体的には先ほどあげた「子どもの遊びのおもしろさ」を、共に味わい始めている様子が見えてくる。さらには、「教員が見えてなかった部分が可視化されている^②」(事例1)、「実習生が入ったクラスの保育者が、『園長先生、見てください』と日誌を持ってきて、自分の見方との違いを話すことから、保育者自身の感じ方を見直し、クラスのふりかえりがあった^②」(事例2)、「実習生が、自分たちとは違う視点でドキュメンテーション型実習日誌を書

いているのを読むと、自分たちもハッとさせられることがある^②」（事例3）といった記述に見られるように、実習生が気づいた「子どもの遊びのおもしろさ」から、保育者が率直に学んでいることもうかがえる。

③保育のプロセスを語り合い、共有すること、ふりかえること

今回の事例から見られることとして、実習日誌がドキュメンテーション型になることによって、対話が生まれやすくなることがあげられる。まずは、「写真があることで、それを見ながら、子どもについて語り合うことができ、子どもを見る視点なども伝えやすい^③」（事例3）「共に子どもについて語り合うプロセス^③」（事例1）という形で、担当保育者と実習生との対話が見られる。さらには、この実習日誌が、「先生同士の対話のきっかけ^③」（事例2）となっている事例も見られた。

そして、「ドキュメンテーション型実習日誌を取り入れることで、保育者にとっても、実習生にとっても、子どもの姿を共有しやすくなり、一緒に語り合うことで、お互いの子ども理解が深まる^③」（事例3）とも述べられる。対話が生まれることによって、保育を共有し、理解が深められていくのである。

このような営みの中で、ひとつ課題としてあげられることは、「ふりかえり」という視点である。「実習生は子どもの姿を読み取りそれを他者に伝えるだけではなく、自分がそこで何を感じ、どう理解し、どうかわったのか、そしてそれをどうふりかえるのかということが大切^③」（事例4）「ドキュメンテーションにすることによってそこが抜けてしまう学生^③」（事例4）という点について、次の研究2で検討を行いたい。

研究2

研究2においては、幼稚園におけるドキュメンテーション型実習日誌を導入した際の学年で、3年次秋に行う実習前半2週間は、時系列とエピソードの形式で、4年次春に行う実習後半2週間は、ドキュメンテーション型で行った事例から、実習日誌で子どもの遊びをどのように記述し、さらにそこからどのように自分と子どもとのかかわりをふりかえっているかの分析を行う。

実習日誌の記述の特徴1：E幼稚園における時系列とエピソードを組み合わせた形式

E幼稚園における時系列形式での実習日誌における遊びの記述は、「それぞれ好きな遊びをする」「子どもたち一人ひとりが好きな遊びをする（鬼ごっこ、ハンターごっこ、ピタゴラススイッチなど）」というひとことどのような遊びかが記されるものであった。

その遊びの記述に対して、担当保育者からは特に記述はなかった。時系列形式で記された部分全体としては、保育者の意図と異なったところに解説が加えられ、保育にかかわる用語、活動が変化した時間などについての間違いの訂正がなされていた。

その後のエピソードの記述欄も、登園の様子、遊びの様子、昼食の様子など1日の一連の出

来事が書かれている日が多い。しかし1つないし2つの遊びのエピソードが、子どもたちと実習生自身とのやりとりも含めて記述され、そのエピソードに関連しての子どもの育ちや自分自身のかかわりに関する考察が行われていることが特徴として捉えられる。ひとつ例をあげる。

朝の自由遊びの時間では、Sくん、Tくん、Hくんと裏山や園庭などを使って、鬼ごっこをして遊んだ。4人で鬼ごっこをしていると、Rくんが私に「鬼ごっこやりたい」と話しかけてきてくれた。私は「Rくんも一緒に遊ぼう!」と笑顔で答えた。私は、Rくんも加わり、5人で鬼ごっこをしているつもりであったが、少し経った頃にRくんが悲しそうな表情で近づいてきた。Rくんは「みんなが鬼ごっこに入れてくれない」と言った。なぜなのかRくんに聞くと、SくんたちはRくんが「入れて」と言っていなかったため、「入れてと言わないからだめだよ」と言っていたのだという。私はRくんに「じゃあ、先生とSくんのところと一緒に行って、入れてもらえるか頼んでみようか」と声かけをした。そしてSくんのもとへ行き、Sくんには、「Rくんが鬼ごっこの仲間に入れてほしいんだって」と言い、Rくんには「入れてっていつてみよ」と声かけをし、私を通して、お互いの気持ちを伝えた。そして、Rくんは「入れて」とちゃんと言うことができ、鬼ごっこに入れてもらい、みんなで一緒に遊ぶことができた。Rくんの鬼ごっこに入れてほしいという気持ちを汲み取ることで、子どもたちがうまく伝えられない気持ちを自分が間に入ることで、伝えあうことができてとてもよかった。この経験から、子どもたちのうまく伝えることができない気持ちを伝えあうように援助することは、保育者の重要な役割であると考えた。

ここでの実習生による遊びの記述は、鬼ごっこをしているときが選ばれている。そして、その遊びの中でも、鬼ごっこに入ることができないという仲間入りのプロセスが描かれている。エピソード記述には、このような「仲間入り」や「いざこざ」など、なんらかの子どもたちの葛藤場面が選ばれていることが多かった。そのようなエピソードが描かれた後、下線部に見られるように、自分がこのような葛藤場面でどのようにかかわったか、今後、どのようにかかわるべきかがふりかえられている場合が多い。

さらに、最後の「反省・明日の課題」欄には、次のような記述が見られる。

今日は、子どもたちの様子や先生方の対応を見ることに集中しすぎてしまい、日誌を書くために1日のスケジュールがあまりメモできていなかったことが反省点である。また、子どもたち一人ひとりの名前が覚えられず、話すときに名前を呼ぶことができなかった。そのため、明日は、子どもたちの様子や先生方の対応を見つつ、子どもたちとも多くかかわり、メモをしっかり行い、把握していきたい。また、E組には、1週間入らせていただくため、一人ひとりの子どもたちの名前を覚え、どんな子なのかを知っていきたい。子どもたちとより積極的にかかわっていかうと考えている。

この記述からは、時系列の日誌を書くためには、きちんと把握すべきこと(例えば、スケジュール

ル、子どもの名前)があることに気づき、それをきちんと把握することが意識されたことが見える。また、実習の課題として、自分が子どもとどうかかわるかを検討していく必要があることも意識されている。ある意味で、実習の中で、なんらかの正解を探究しようとしている姿勢を見てとることができる。

このような記述に対する保育者のコメントとして、次のようなものが見られた。

実習初日、お疲れ様でした。初めてのことばかりで戸惑うことも多くあったと思いますが、笑顔で子どもたちの目線に立ち、頑張ってくれていたのも、うれしかったです。記録の方には、子どもたちの姿から感じとったこと、またそれについての先生の動きを見て思ったことを書いてくれましたね。本当に先生の声がけは、子どもたちにとって大切なものです。声をかけるタイミングや言葉など、これからの実習でもたくさんの先生方の声がけ、接し方を見て学んでください。これからの実習を楽しみにしています。一緒に頑張りましょう。

ここには、特に子どもたちの遊びに対する具体的な記述はなく、実習生に子どもたちとかかわること、そしてそのかわり、声がけについて、自分たち保育者の子どもたちとのかかわりを見ながら学んでほしいという願いが読み取れる。実習生に求められるものは、子どもたちとどうかかわるかを学ぶということが、中心的な目標として設定されているように見える。

このように時系列とエピソードでの記述では、実習生は、子どもの遊びの中で、仲間入りが難しかったような、かかわりが難しい葛藤場面について記述し、ふりかえり、どのようにかかわると良いかを考える、そして、保育者はそれについてあたたかに励ましつつも先輩の立場から助言、指導する、という営みを見てとることができる。特に、時系列の記述については、実際にはこうであったという指摘を中心に、保育者が学生にいわゆる正解を助言、指導するという一方向的な「教える－教えられる」関係性がうかがえた。

実習日誌の記述の特徴2：E幼稚園におけるドキュメンテーション型実習日誌

E幼稚園におけるドキュメンテーション型実習日誌の記述は、自由なレイアウトで複数の写真を貼り、文章を付していくものであった。ひとつからふたつの遊びについて写真と文章で丁寧に記述がされていることが特徴である。ある1日の「おそば屋さん」と付された記述を紹介する。

①〈ある子どもが机に向かって立ち、はさみでペーパーヤーンを切っている写真〉

Tくんがコーナーで大量の毛糸を見つけ、「そばを作る!」と言った。担任の先生は、毛糸はコーナーのものなため、ペーパーヤーンを使うことを提案した。S組のお部屋でTくんは私の顔を見て次のように言った。Tくん「おそばやさんでーす!」私「おそばやさんですか? 食べたいです!」Tくん「何にしますか?」私「メニューは何がありますか?」Tくん「そばです」私「じゃあそばをお願いします!」

② 〈①と同じ机に、Tくん以外にも6人の子どもたちが集まってきている写真。3人の子どものはさみを持って切っているところのアップの写真〉

Tくんがおそばを作っている様子を見て、周りの子どもたちも集まり、作り始めた。Mくんはままごとのお更にそばを盛って、自分のそばを作っていた。Kちゃん、Rちゃん、Mちゃんなどの5、6人は、みんなでひとつのそばを作るという姿が見られた。はさみを上手に使って切ることを楽しんでいる様子が見られた！

③ 〈箱の中のお蕎麦の写真2枚〉

おそばを切り終わった後、子どもたちは担任の先生が置いた折り紙を切り始め、そばの上にかけて始めた。私「黄色と緑色は何かな？」Rちゃん「黄色はたまごだよ」Kちゃん「緑色はねぎだよ」私「とてもおいしそうだね！」またそばを作っている過程でKちゃんは「まだそれはやっちゃだめ」「最後の折り紙はじゃんけんしなきゃだめ」「みんなで作らなきゃ最後にできたって喜べないよ」など、自分の思いを発言していた。それを聞いた周りの子は、少し不満そうな表情を浮かべていたが、何も言わず、すぐに切り替えて集中して作っていた〈牛乳パックのアップの写真〉に吹き出し形式で

Yちゃん 牛乳パックの中に水とそばを入れていた。Yちゃん「本物のおそばみたいでしょ？」〈考察〉

はじめは、Tくんひとりがおそばやさんをやっていた。それを見た周りの子が次第に集まり大人数での遊びへと広がっていったことから、遊びのきっかけは保育者だけではなく、友だち同士でも存在するということに気づいた。また、そばを子どもたち一人ひとりが作るだけではなく、「皆でひとつのものを作る」ことをしていたことから、4歳児の友だち同士のかかわりをしていたのではないかと考えた。Kちゃんの発言を聞いて、Kちゃんは「みんなで力をあわせて作りたい」という強い思いがあったのではないかと考えた。しかし、Kちゃんの思いばかりを尊重するのではなく、周りの子どもたちはどうしたいのか、私が聞いていれば、お互いの思いを伝えあうことができたのではないかと考えた。

遊びの記述がとても生き生きと具体的になっている。遊びが具体的に捉えられるのは、実際には添えられている写真の力もあるが、ここに見ることができるように、文章自体も、会話が具体的であったり、それぞれがどのようなものをどのように作っているかというプロセスが丁寧に描かれていたりすることも寄与している。そして、その中でさらに気になった出来事であるKちゃんの姿について、どのようにかかわると良いかをふりかえっている様子も見られる。その際、実習生自身が、このような葛藤場面はどう対処すれば良いかだけに注目するのではなく、子どもたちそれぞれの思いを大切にするにはどうかかわると良いかということが言及されていることも特徴としてあげられる。

このような記述に対して、保育者が書いていることを以下にあげる。

もっと多くの容器（おそばを入れる）が環境として用意されていたら、一人ひとりこだわりを持ったおそば作りを楽しめたかもしれないですね。「どうしたら遊びが発展するか」「子どもたちはどんな思いを感じながら遊びを進めているか」を保育者が捉えて、事前に環境として子どもたちの見えるところに素材を置いておくと、遊びがより盛り上がるかも。

「おそば作り」と「ジュース屋さん」別々のふたつの遊びを見て、水をそばつゆに見立ててよりリアルな「そば」を作ったYちゃんの発想がすごく面白い！！

友だち同士のかかわりが増えてきたからこそ、遊びの中での「子どもたち同士の対話」を大切にしてください。

集団遊びの中で、一人の思いが先行してしまい難しさが出てきたときは、必要に応じて保育者が間に入り、子どもたち同士で互いの思いに気づけるとよいですね。

実習生の具体的な遊びの記述に対して、保育者もより具体的にコメントをしている。特に、Yちゃんの発想のおもしろさに共感する記述は、時系列とエピソード形式の際には見られなかったものである。さらには、その日展開していた遊びがどうしてもっとおもしろくなるかを一緒に考え、さらに具体的な発展を考えようとする姿勢が読み取れる。

ドキュメンテーション型実習日誌によって、実習生の遊びの記述が具体的になることが示唆される。そして、そのような遊びの記述の中で、ふりかえりもまた子どもの姿にあわせた具体的なものが生まれてくる可能性も読み取れる。さらに、そのような実習生の遊びの記述に対する保育者のコメントは、単に「こうしたら良い」という保育者から実習生への指導的なものではなくってきている。保育者も、具体的な遊びの中で子どもたちの様子に共感し、その遊びの展開を実習生と共に考えようとする姿勢へと変化していることがうかがえた。

全体的考察

研究1、研究2を通して、ドキュメンテーション型実習日誌を導入することで、「子どもの遊びのおもしろさ」に実習生も保育者も具体的に気づきやすくなるプロセスが見られた。保育の質を考える上で、この「遊びのおもしろさ」に気づけるということ自体が非常に重要である。なぜなら、質の高い保育を考える際、このような活動を行えばよりよい質の保育が行えるというマニュアルは存在せず、日々子どもたちとの活動から、「よりよいこと」を常に問う姿勢が求められるからである。そして、ドキュメンテーションは、日々子ども主体の活動、遊びの何が大事であるかを問い、そこにどうかかわるかの基盤となる。実習日誌もまた、ドキュメンテーション型を導入することによって、そのような日常における子どもの活動や遊びのおもしろさに気づく助けとなることを見出された。

さらに、このような保育の「おもしろさ」をめぐる営みは、個々の保育者で行われるものではなく、協働的な営みである。今回、ドキュメンテーション型実習日誌の導入で見られたこと

に、子どもの姿をめぐって実習生と保育者が対話することによって、共に探求が深まるプロセスがあった。また、その対話のありようは、従来の実習日誌では、保育者が実習生に指導する形になりがちであったことと比べて、ドキュメンテーション型実習日誌では、保育者が実習生と共に考えるという関係性が生まれてきやすいことも見てとれた。つまり、ドキュメンテーション型実習日誌では、実習生が、実習生なりの見方で保育にかかわることができる可能性、実習生と保育者の関係性の変容がもたらされやすいことも見出された。

このような保育の質を高めるプロセスに、実習生も実習生なりにかかわれる営みの中で、子どもの具体的な姿から自分を問うというふりかえりも生まれてくる。ドキュメンテーション型実習日誌では、子どもの姿が見えても、自分自身の保育のふりかえりが見えにくいということが指摘されてはいるが、ふりかえりのありよう自体も、ドキュメンテーション型実習日誌にすることで、より「子どもの遊びのおもしろさ」を具体的に考えていくことから始まる可能性が示唆された。

今後の課題として、2点あげておきたい。1点目は、写真という媒体をめぐっての検討である。ドキュメンテーション型実習日誌の効果、すなわち子どもの遊びのおもしろさに気づくことや対話が生まれやすいということは、写真という媒体が支えている部分も大きい。その写真の撮影のあり方や対象について検討するとともに、その写真を見ながら実習生と保育者が対話する機会をどのように作り、またその対話がどのような意味をもたらしかについて、さらに詳細な検討が必要である。また2点目としてあげられるのは、実習生、および、保育者の学びのプロセスである。ドキュメンテーション型実習日誌によって、実習生だけではなく、保育者にも学びが見られることが示唆された。そのプロセスを、ドキュメンテーション型実習日誌の記述そのものから、さらに分析を行っていきたい。実習が、そのようなお互いの学び合いの機会となりうること、そのことが保育の質の向上とも関連していくことについて、さらなる検討が必要である。

注

- 1) 本研究は、玉川大学学部等改革推進制度により行っている共同研究の一部である。本論文の執筆に関しては、内容に関して全員で検討を行った上で、問題を大豆生田啓友、研究1の事例1を田澤里喜、事例3を鈴木美枝子、事例4を田甫綾野、そのほかを岩田恵子が執筆した。
- 2) 厚生労働省『中間的な論点の整理（保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会）』2018（平成30）年9月26日
- 3) 大豆生田啓友・岩田恵子「わが国におけるドキュメンテーションの可能性に関する一考察」『子ども学 第7号』2019、125-140。
- 4) 陸路和佳・松本和美・山田吉郎・山室吉孝・山里哲史「子どもを視る眼を育む実習日誌について」『鶴見大学紀要 第56号 第3部』2019、65-69
- 5) 亀山秀郎・佐竹智恵子・志方智恵子「認定こども園における実習生が撮影した写真の実習記録への活用」『幼児教育WEB ジャーナル第2号』2019、34-41

参考文献

- 秋田喜代美「なぜいま、あらためてレッジョ・エミリアか」『発達156号』ミネルヴァ書房, 2018, 2-7
- 岸井慶子（監修）『3つのカベを乗り越える！保育実習リアルガイド 不安 日誌 指導案』Gakken, 2017
- 小泉裕子・佐藤康富『写真とコメントを使って伝えるヴィジブルな保育記録のススメ』すずき出版, 2017
- 森真理『子どもの育ちを共有できるアルバム ポートフォリオ入門』小学館, 2016
- 森真理「ドキュメンテーション—レッジョ・エミリアとの対話」『発達156号』ミネルヴァ書房, 2018, 20-26
- カルラ・リナルディ（里美実訳）『レッジョ・エミリアと対話しながら：知の紡ぎ手たちの町と学校』ミネルヴァ書房, 2019
- 白石淑江『スウェーデンに学ぶドキュメンテーションの活用』新評論, 2018
- 請川滋大・高橋健介・相馬靖明『新時代の保育1 保育におけるドキュメンテーションの活用』ななみ書房, 2016

Early Childhood Educational Practical Training Records by Documentation

Keiko IWATA, Hirotomo OMAMEUDA, Mieko SUZUKI

Satoki TAZAWA, Ayano TAMPO

Abstract

We examined the advantages and problems of introducing documentation into training diaries when university students received practical training in nursery schools in Japan. Study 1 analyzed four episodes wherein nursery school teachers and university students used documentation-type training diaries, whereas Study 2 examined the contents of the documentation-type training diary in terms of characteristics that distinguish it from a conventional training diary. The studies obtained the following results: (1) Notating children's interest and involvement of students during playtime became easy upon using a documentation-type training diary. (2) Documentation facilitated the training of teachers, particularly in terms of children's perspectives and learning from university students through educational practical records. (3) Students were encouraged to discuss early childhood educational practices and were open to share with teachers. Furthermore, in comparison with the conventional training diary, the relationship between the training teacher and students became one in which they were "thinking together" using the documentation-type training diary. Thus, exploring other avenues where the documentation-type training diary provides effective support in terms of early childhood care and educational practices is necessary.

Keywords: documentation, training of nursery teachers, early childhood educational practical records